
春成秀樹先生を送る

西本豊弘

本館研究部考古研究系教授、春成秀樹先生は本年3月末をもって定年退職される。春成先生は1980年に文化庁国立歴史民俗博物館設立準備室に赴任されて以来、本館の創設準備に努力され、本館開館後は研究活動と博物館活動に従事されてきた。ここで、春成先生の退職にあたり、先生の略歴と業績を簡単に紹介する。

春成秀樹先生は1942年兵庫県生まれで、一時鹿児島県加世田市に疎開後、兵庫県明石市に居住された。岡山大学法文学部史学科日本史専攻を卒業後、九州大学文学部大学院に進まれたが、すぐに岡山大学法文学部の助手となり、その後、講師として教育に従事された。1980年に文化庁文化財保護部に移られ、国立歴史民俗博物館設立準備室で勤務された。1981年に国立歴史民俗博物館が設置されると考古研究部助教授に任命され、その後1990年に教授とられた。1997年から2001年までは考古研究部長を勤められた。

春成秀樹氏の研究分野は主に旧石器時代から古墳時代に及び、石器・土器・骨角器・人骨・埴輪・青銅器・鉄器などあらゆる考古学遺物や遺構についての研究を進められた。著書・論文などは業績目録に示されたように1962年以来400編以上と膨大であり、その貪欲とも言える研究姿勢に感嘆の意を禁じ得ない。学会発表や講演も多いことは当然であり、多くの大学で講義も行われた。また、著名な研究者の業績を再発見・再評価し、著作の復刻などに努められている。多種多様な研究活動が特徴といえるであろう。なお筆名として春成秀爾を用いられたので、その名前を本名と思っている方が多い。

さて、国立歴史民俗博物館に着任される前の研究業績は、主に縄文時代と弥生時代、古墳時代に関するものである。縄文時代に関する研究では、雑誌・考古学研究に発表された「抜歯の意義」がある。この論文は縄文晩期の人骨に見られる特異な抜歯を分類し、その結果から当時の社会関係にまで迫ろうとした研究である。これは今まで形質人類学者に任せていた縄文人に見られる抜歯の問題を考古学特有の分類方法と視点から研究したものであり、当時の縄文社会研究を大きく前進させた研究である。

弥生時代の研究では、雑誌・考古学研究に発表された「弥生時代はいかにして始まったか」・「銅鐸の埋納と分布の意味」などがあり、古墳時代の論考では、「弥生墳丘から古墳へ」などがある。

国立歴史民俗博物館に着任された後の研究活動は、まず、これまでの旧石器時代から古墳時代の研究をさらに展示の形として表現したことである。第1室の総合展示で弥生時代のコーナーを主に担当すると同時に、旧石器時代や縄文時代の展示、古墳時代の展示に大きく寄与された。そして総合展示図録に多くの研究成果をわかりやすくまとめられた。

歴博における資料収集では弥生時代の青銅器の収集に努力された。それは資料の購入だけではなく

く、各地出土の銅鐸のレプリカを作成することにも努力され、歴博の考古資料コレクションの代表的なもののひとつとなっている。これらの銅鐸とそのレプリカを用いて企画展示『銅鐸の美』が開催され、その展示代表者として企画立案から展示図録の作成まで担当された。この企画展示は、1995年10月から1996年9月まで、歴博の他に全国の6博物館を巡回する大きな企画展であった。また佐原真先生を展示代表者として1996年に実施された企画展示『倭国乱る』に参加するなど多くの企画展示に携わられた。

歴博での研究では、直良信夫先生の明石原人説に関する研究の研究代表者を努め、明石海岸を発掘し、多くの研究者の協力を得て発掘報告書を刊行した。その他、多くの共同研究の代表者やメンバーとして研究を行われている。

その間の研究業績は多量である。弥生時代に関するものでは『弥生時代の始まり』などがあり、縄文時代研究では『縄文社会論究』の著作がある。歴博の研究報告にも「銅鐸の時代」・「弥生時代九州の居住規定」・「弥生時代畿内の親族構成」・「男と女の戦い」など多くの研究論文が発表されている。そして、これらの研究業績に対して1993年に濱田青陵賞と雄山閣考古学特別賞が授与されている。また、2003年に論文「縄文社会論究」により九州大学から博士（文学）の学位が授与されている。

近年は直良信夫先生などの研究者の再評価を行い、直良先生の著作の刊行に勤められた。これは、直良先生が明石に在住したことから春成先生と同郷であり、特に直良先生の研究に注目されたという事情もある。そして、直良先生のコレクションを遺族から歴博に寄贈いただき、直良先生の旧稿を多量に復刻出版するなど、直良先生の再評価に努力されてきた。

また最近、歴博で実施している炭素14年代を用いた弥生時代の実年代に関する研究にも積極的に参加され、『弥生時代の実年代』を共編著されるなど多くの著作や論文、研究発表を行われている。特に、弥生時代の青銅器と鉄器の年代について、韓国や中国での調査を行うなど精力的に研究されている。また、歴博で所蔵されている愛媛県上黒岩遺跡出土資料を契機として、上黒岩遺跡の発掘報告書を作成することとなった。現在、博物館外の多くの研究者の協力を得て進めておられる最中である。

春成先生の学会活動については、岡山大学在職中から考古学研究会での雑誌編集に努力されるとともに、その後同研究会の代表を勤められ、考古学研究会の中心メンバーのひとりとして活躍されてきた。

また、1998年に歴博が総合研究大学院大学の文化科学研究科の1員となり日本歴史研究専攻が設置されると、その教授を務められた。授業科目の考古資料研究を分担され、弥生青銅器の研究を指導された。その間、学外の3人の研究者からの博士論文申請について主査や審査員を勤められた。

このように、春成秀樹先生の研究活動は実に多彩であり、研究領域の広さと多くの識見と、その真摯な研究姿勢に感服する次第である。

(国立歴史民俗博物館研究部考古研究系)